



書名：彗星物語

著者：宮本輝

出版社：文藝春秋

出版年月：1998年7月

総ページ数：427ページ

ISBN：9784167348137

推薦者

小倉正義

鳴門教育大学大学院准教授

臨床心理士養成コース

中高生時代とにかく本を読んでいた。流行のゲームをするよりも、本を読んでいるほうが楽しくて、1日1冊かそれ以上のペースで読んでいたように思う。読んでいた本は9割以上が小説で、そのジャンルはあまり問わなかった。最新のファンタジー（今でいうところのラノベ）から昭和初期の作品、海外の古典的な作品まで幅広いジャンルの小説を読みあさった。1日休みがあれば図書館と本屋を巡って好きな本を借りたり買ったりしてきて、空想と現実の間のような感覚のなかで本に入り込むのが好きだった。小学生の時はそれほど本が好きではなかったのだから、そこまで本にはまり込んだ理由をはっきりとは思い出せない。ただ、本にはまり始めた初期に読んだ本は、母の影響は少なからず受けていたと思う。

母が好きだった作家の中に宮本輝（敬称略）がいた。宮本輝といえば、当時（1990年くらい）ご存知の方もいると思うが、ネスカフェのゴールドブレンドのCMに出ていた「違いがわかる人」だ。宮本輝の作品は、関西弁で織りなされる家族の物語が胸に響く作品が多い。当時の自分には、母が家族について考えていることはきっと理解できなかったが、宮本輝の作品を読むことで、母の考えている家族が理解できる気がしたのもあるかもしれないなど、今振り返ると思う。

そんな宮本輝の作品の中でも特に印象深く残っている作品の一つが、ここで紹介する「彗星物語」である。図書館からハードカバーの本を借りて読み、しばらくして文庫でも買って読んだ。「彗星物語」は、祖父と夫婦と子ども4人、ビーグル犬1匹の家族に、離婚した妹とその子どもたち4人が帰ってきて、ハンガリーからの留学生も迎えることになった城田家の13人と一匹の物語である。大家族ならではの様々なドラマもさることながら、フックという一匹のビーグル犬の存在が、物語に深みを与えている。

家族の関係性の中で自分がいることの意味を考えさせられ、これから将来を選ぶ中高生年代の当時の自分にとっては、自分について考える上でもいろいろな意味で心を動かされる作品だった。詳細はここには記さないが、将来や進路に悩んだとき、自分を支えてくれた一節を紹介しておこうと思う。

ハンガリーから来た留学生のボラージュが祖国に帰る際に、城田家の恭太と交わした会話（p412-413）である。

「ぼくたちの国が、自由を取り戻すのは、いつになるのか、ぜんぜんわからない。だけど、『さあ、これからだ』だからね。いつかきっと、ブダペストで逢おう。自由になったブダペストで、恭太と逢おう。恭太も、あきらめないで勉強して、必ず、医者になって下さい」

「うん、ぼくにはサッカーの才能はないから」

「マラドーナは世界でひとりだけ。ジーコも世界でひとりだけ。ベッケンバウアーもプラチニもひとりだけ。でも恭太という人も、世界にひとりだけ」

この部分だけを読んでも素敵な会話だが、この会話は前後の文脈があってこそその心の交流があり、より深い意味をもつ。

ぜひみなさんも読んでいただいて、自分のこと、家族のこと、生きているということを改めて感じてみてください。

